

今月のメッセージ (2012年9月)

日本銀行富山事務所長
佐子 裕厚

江戸時代に戻れますか。

この夏、暇を見つけては立山に行ってきました。立山黒部アルペンルートを使って、黒部湖に2度行ってきましたし、一の越から雄山に登りました。室堂や弥陀ヶ原を散策し、立山カルデラ砂防体験学習会にも参加してきました。

雄大な立山連峰は富山県の財産だと思います。立山、剣岳、大日岳、奥大日岳、薬師岳といった峰々を仰ぎ見る度に、その美しさに感動し、雄山以外の山にも登ってみたいものだと思います。

五木寛之の近著に「下山の思想」という本があります。経済や社会の移ろいを登山に喩え、現在の日本は山頂を極めた後の下山の段階にあり、ゆっくりと足を踏み固めながら新しい展望を拓いていくべきである、としています。

確かに、戦後の復興期から1960年代末にGDP世界第2位となり、オイルショック、バブル経済などを経て、今後の日本は、少子高齢化に対応した社会を作り上げていくべき段階にあるように思います。

江戸時代の日本を研究されている田中優子教授(法政大学社会学部長)の講演を拝聴する機会を得ました。江戸時代は「遅れた時代」というイメージが強かったのですが、既に進んだ社会が形成されていたようです。

江戸時代の日本は、オランダ東インド会社を通じて、ヨーロッパ、中国、インドなどの海外産品を輸入し続け、鉄砲、絹織物、木綿、朝鮮人参などの輸入品に学ぶことで製造技術を著しく向上させ、他方で、リサイクル社会が徹底され、自然と共生した経済活動が営まれていた、ということです¹。

幕末に日本を訪れた米国総領事ハリスは言います。「我々は日本人の容姿と態度に甚だ満足した。日本人は、喜望峰以東のいかなる民族よりも優秀である」²。現代の我々が江戸時代の生活にそのまま戻ることは出来ようもありませんが、江戸時代の人々が生き生きとした生活を営んでいたという事実は、「生活の豊かさ」というものを考えるうえでの重要なヒントになるように思います。

9月1日から八尾で行われる「おわら風の盆」も元禄時代を起源としています。

以 上

¹ 「グローバル化の中の江戸」(岩波ジュニア新書)などの著書に説明があります

² 「日本滞在記」(岩波文庫)